

いかなる人間観も、人間の一面を鋭く言い当ててはいるものの、けっして人間の全体像を捉えたものではない。一面に光を当てれば当てほど、他面が影に隠れてしまふかのである。

最近の認知科学や人工知能研究では、人間を情報処理装置と見る人間観が支配的であるが、これも例外ではない。この人間観によれば、人間は知覚を通じて外界の情報を取り入れ、心ないし脳でそれを処理加工し、その結果を行動の形で出力する。比喩的にいえば、人間は草食動物や肉食動物であるだけではなく、情報を食べて生きる「情報食動物」でもあるというわけだ。

はじめてこの考えに接したとき、非常に新鮮な感銘を受けた覚えがある。宇宙を貫くエネルギーの流れが万物に躍動を与えるように、われわれ人間はわれわれを取り巻く情報の流れに貫かれて生きている。ときには氾濫する情報に溺れそうになることもあるが、それなくして人間の生は成り立

情報食動物としての人間観について 信原幸弘

たない。情報はまさにわれわれ人間にとって「いのちの糧」である。

このような人間観に心をひかれて、それ以後、この人間観の可能性を哲学的に探ってきたが、その結果、最近この人間観には二つの点で重要な問題があるように思えてきた。一つは、人間の心には、情報処理だけでなく、感情や気分のような側面もあり、前者を後者から分離独立したものと見なすわけにはいかないのではないかという点である。もう一つは、人間が生物として、環境のなかでそれに適応しつつ生きてきたという生態学的、進化的事実を度外視して、心の情報処理にそれ本来の意味を与えることはできないのではないかという点である。

これらはいずれも、人間を非生物的で非歴史的な知能ロボットと同一視することを阻む論点であるが、そこからどのような新たな人間観が——たとえそれがふたたび乗り越えられるものであるにせよ——生まれるかは今後の課題である。

(のおはら ゆきひろ・関東学院大学講師—哲学)